
How Self-Evaluations Relate to Being Liked by Others: Integrating Sociometer and Attachment Perspectives

Journal of Personality and Social Psychology, **89**, 966-977

Rep. 脇本竜太郎¹

◇個人の自己評価は、社会的関係・社会的経験と密接に絡み合った感情である。

- ・ **James(1890)** : 個人の自己に対する感情は、恋人、友人、隣人の視点からの評価と密接に関連している
- ・ 恋人、仲間、隣人は、その個人に慣れ親しんだ社会的観察者であり、極少しの情報から即時的 (**Bargh, 1997**) で有意味 (**Ambady & Rosenthal, 1992; Gosling et al., 2002**) で継続的 (**Kenny et al., 1992**) な印象を形成することができる⇒これら人々からの評価と自己評価の関連は非常に重要

◇自己評価と他者評価が関連するとすれば、どのように関連しているのか？

①自己評価が他者に対する呈示の仕方、ひいては他者から引き出す反応に影響を与える。(自己評価→他者評価)

→**Taylor & Brown(1988)** の、肯定的自己評価が社会的利益をもたらすという知見と整合、**Self-broadcasting perspective**

②自己評価が、他者がその個人をどのように感じているかによって影響される(他者評価→自己評価)

→鏡映的自己 (**Cooley, 1902**), **Sociometer(Leary et al., 1995)**

◇さらに、自己評価と好かれやすさ (**likability**) の関連には、系統的な個人差が存在する

- ・ **Bowlby(1969)** : 異なる個人は、対人的行動の制御と関係の知覚に異なる方略を使用する
- 愛着の歴史が異なる個人は、自己評価、他者への反応、行動を通して引き出す他者からの反応が異なっているかもしれない。

◇以上を踏まえ、本研究では自己評価と他者評価のダイナミクス、および愛着スタイルがそのダイナミクスに与える影響を、自然な社会的相互作用を含むデザインを用いて検討する。

Self-Evaluations and Interpersonal Process: The Sociometer and Self-Broadcasting Perspectives

◇自己評価が他者評価に影響するのか、されるのかという問題には、いくつかの社会心理学の理論が取り組んできている。

- ・ **Cooley(1902), Mead(1934)** : 他者の視点から自己評価は行われる

¹ 東京大学大学院教育学研究科博士課程 2 年 e-mail:wyvern AT p.u-tokyo.ac.jp

- **James(1890)** : 他者の評判は自己の主要な要素である
- **Leary et al.(1995)** : **Sociometer** 仮説. 自尊心の機能は, 所属状態(**belongingness**)に関する情報を与えること
 - …否定的自己評価は適切な近接性を維持できていないことを示す内的なシグナルになる
 - 現実の, もしくは想像上の社会的対象から直接的・顕在的なフィードバックを与える実験室実験で, 支持する知見(**Leary et al.,1998; Leary et al.,1995; Nezlek et al.,1997**)
 - 自然な相互作用を用いた研究でも, 仮説と整合する知見
 - Nezlek et al.(2002)**個人内での社会的相互作用の質の変化に, 社会的スキルの自己評価が続く
 - Murray et al.(2003)**日誌法による研究で, 知覚された受容が, 恋愛関係における自尊心に寄与することを報告
 - しかし, これらの研究は, 他者の知覚を直接測定していない. …自己評価よりも自己知識を測定?

◇**Sociometer** と反対の予測(自己評価がどのくらい他者から好かれるかを規定する)を立てる立場…**self-broadcasting perspective**

- この視点に関する知見は, 一貫しない(**Bond et al.,2003; Brockner & Lroyd;1986; Heatherton & Vohs, 2000;** レビューは **Baumeister et al.,2003** 参照)
- ←しかし, これは研究間で自尊心の定義が異なっている(領域一般 vs 領域限定. さらに, 全般でもそれが拠って立つ領域は個人間で違う)
- 本研究では社会的領域での自尊心を測定する. このことにより, **sociometer** と **self-broadcasting** をより精密に検証することが出来るはずである.

Attachment and the Social Self

- ◇愛着理論の想定: 人は他者との絆を維持し, 他者から保護を引き出す感情・行動制御のシステムを持っている
- このシステムがどのように機能するかは個人間で異なり, この個人差は不安と回避の二次元でよく説明される(**Brennan et al.,1998**).
 - 不安次元: 拒絶および他者からの支援を得られないことについて心配する傾向の個人差の次元
 - 回避次元: 他者に接近するか, 親密さを回避するかの個人差の次元
 - この 2 つの次元の組み合わせで, **Bartholomew & Horowitz(1991)**が提唱した愛着スタイルを定義することができる(**Figure1**). また, この二次元の相関は非常に低い(**Brennan et al.,1998** 他)
- 成人は, 一般的な愛着スタイルと同時に, 長期的な関係に対する別の愛着スタイルを持つことを示唆する研究も存在(**Baldwin et al.,1996; Beer & Kihlstrom, 2004**)
- しかし, 既存の関係が存在しない, 新規な他者との相互作用では, 一般的愛着スタイルが影響を及ぼすはず…本研究では, 他人同士で構成されたグループで研究を実施.

Anxiety and Avoidance: Implications for Self-Evaluations and Likability

Self-evaluations.

◇愛着スタイルの、自己評価に対する直接的影響を示した研究が存在

- ・愛着不安は、領域一般的自尊心と負の関連(**Bartholomew & Horowitz, 1991**)、否定的特性の自己帰属に正の関連(**Mikulincer, 1995**)
- ・愛着回避は、社会的領域の自尊心とは負の、能力(**competence**)領域の自尊心とは正の関連(**Brennan & Morris, 1997**)

◇**Mikulincer & Shaver(2003)**のモデル

- ・愛着不安と愛着回避の自己評価への影響は、その源を異にする。
 - 愛着不安高者は、慰めを与える愛着対象がいない時に、過活性方略(**hyperactivating strategy**)を使用する。これには、他者からの支援を得ようと猛烈に努力したり、他者との近接性、他者の利用可能性に対して過敏になったりすることが含まれる。
 - 愛着回避の程度は、活性不全方略(**deactivation strategy**)使用の個人差を反映。これには、他者からの支援がないことの苦痛から自己を守るための、独立性の主張や他者との心理的・物理的距離を維持することが含まれる。
- 愛着不安が高いものの自己評価の低さは、他者の支援を勝ち取ろうとする意図と関連。一方で、愛着回避の高いものの自己評価の高さは、自立性を示そうとする意図と関連。…愛着回避の高い者は、自己価値の基盤を社会的領域からは引き出さない。

Likability

◇**Mikulincer & Shaver** のモデルは、さらに上記 2 つの方略と、他者のその個人に対する認識の関連を示唆している。

ex.一般的に自己開示をする人ほど、他者から好かれる。しかし、過度な自己開示は関係の構築を阻害(**Collins & Miller, 1994**)

→愛着回避の強い者はあまり自己開示をせず、愛着不安の高いものはあまりに容易く自己開示を行う(**Keelan et al.,1998**)…共に他者からの好感度を下げてしまう

Anxiety and Avoidance: Implications for Sociometer Processes

◇上記のような、自己評価への直接的な影響のほかに、愛着回避と愛着不安(の人々が用いるそれぞれの方略)は、自己評価と他者からの評価の関連(**sociometer**)を調節するであろう。

- ・過活性方略は **sociometer** を増強し、そのため愛着不安の高い個人は、他者からの評価の変動に非常に強く反応するかもしれない
 - 愛着不安は、別離に対する強い警戒心、愛着関連概念の慢性的な高活性と関連。これら関連は、愛着システムへの脅威が存在しない状況でも示される(**Hazan & Shaver,1987; Mikulincer et al.,2000; Mikulincer et al.,2000**)
- Sociometer** が他者との近接性の維持に資するようデザインされているのであれば、愛着不安の強い個人で **sociometer** は最も敏感なはず。
 - …自尊心(不安と関連すると考えられる)が、社会的拒絶の効果を調節するという知見がある(**Nezlek et al.,1997**)
- ・一方、活性不全方略は **sociometer** を機能低下させ、そのため愛着回避の高い個人は、社会的環境に鈍感になるかもしれない。

愛着回避の強いものは、認知的負荷が低い時、または愛着への脅威が顕現化した時のみ、愛着関連概念の活性を低下を示すと考えられる。・・・愛着回避は特定の文脈においてのみ、**sociometer** の機能を低下させる

Overview of the Present Study

◇本研究の目的

- ・自己評価と他者からの評価の関係は、**sociometer** と **self-broadcasting** のどちらの予測に従うのかの検討(あるいは両方)
- 他人同士が複数回相互作用を持つ縦断研究を採用し、遅れ効果(**lagged effect**)を検討することで、双方を同じ研究で検討することが可能
- self-broadcasting** を支持するパターン：自己評価が上がった時、次の測定で他者からの評価が高まる
- sociometer** を支持するパターン：他者からの評価が上がったとき、次の測定で自己評価が高まる
- ・自己評価と他者からの評価の関係を、愛着スタイルが調節するのか？
- 愛着不安が過活性方略と関係するのなら、愛着不安が高いほど他者からの評価が自己評価に与える影響は大きいはず。
- 一方、愛着回避が活性不全方略と関係するのなら、愛着回避が高いほど他者からの評価が自己評価に与える影響は小さいはず。

Method

Participants and Procedure

- ◇被験者：週ごとに 4 回開催されるグループミーティング全てに参加した **151 名**(全ての参加者の **72%**)
- ・ **51%**が女性
- ・除外された人と愛着次元や性別での有意な差はなし
- ・有りうる組み合わせの関係のうち、**97%**が初対面、**2%**が見かけたことがある、少し知っている程度、**1%**が事前の友人関係あり。
- ・各グループの人数は **4 人～8 人**(平均 **5.5 人**)、グループ内の男女は同数。

◇研究の流れ

- i グループで相互作用に入る前(初回)に、愛着作業モデルの個人差の尺度に自己報告で回答(**Time0**)。
 - ii グループでの相互作用を開始。相互作用を促進するために、課題を与える。
- 1 週目：Lost on the Moon 課題²(Time1)**
 - 2 週目：自己開示課題(Time2)**
 - 3 週目：リーダーなしのグループ討議(Time3)**

² 集団の意志決定過程や個人と集団の意思決定の違い、その中でのリーダーシップ等が評価できる課題。web 版が <http://nasa.perbang.dk/>で体験できます。

4 週目 : Beyond Balderdash³(Time4)

iii 毎週の課題終了後、自己評価と、グループ内の他者の評価を記入

Measures

- Bartholomew & Horowitz(1991)の愛着尺度

4つの愛着スタイル(安定(**secure**), 恐れ(**fearful**), 撤退(**dismissing**), 没頭(**preoccupied**))を記述したパラグラフを読み、自分にどのくらい当てはまるかを評定する。

没頭型と恐れ型は不安が高く、安定型と撤退型は不安が低い

→不安得点は没頭+恐れ+安定(逆転)+撤退(逆転)で算出

同様のロジックで、回避得点は撤退+恐れ+安定(逆転)+没頭(逆転)で算出。

- 他者からの評価(標準偏差は **0.44~0.54**, 安定性は**.44~.74**)

私はこの人が好きだ(**I like this person**)という項目に**0(強く反対)-10(強く賛成)**の11件法で回答。**SOREMO(Kenny, 1998)**⁴ソフトウェアを用い、ターゲット得点(他者からの評価の合成)と知覚者得点(他者への評価の合成)を産出。さらに、**SOREMO**はグループ間の差を除去するので、この2つの得点はどのグループに属するかとは独立。

→ターゲット得点は他者からの評価の平均値に似ているが、ターゲットごとに評定者が少し違うという問題を統計的に補正してあるので、より正確。さらにグループ内でセンタリングされているので、所属グループ内の他者と比べてどの程度好かれているかを示している。

- 自己評価(標準偏差は **1.38~1.48**, 安定性は**.55~.74**)

私は好かれる人間である(**I am a likable person**)に**0(強く反対)-10(強く賛成)**の11件法で回答。標本平均でセンタリング

Results

◇本研究では、まず **self-broadcasting** と **sociometer** の検証のため、愛着得点を独立変数に含まない遅れ効果の分析の結果を報告する。その後、愛着の主効果と調節効果を含んだモデルによる分析結果を報告する。

The Interpersonal Dynamics of Self-Evaluations and Other's Liking

◇交差遅れ効果回帰分析(**cross-lagged regression analysis**)を行った。今回のデータは、複数の測定時点が個人にネストし、さらに個人がグループにネストしているので、階層モデルで分析を行っている。

Self-broadcasting

◇モデル

- Level1

$$other_{tj} = \pi_{0j} + \pi_{1j}other_{(t-1)j} + \pi_{2j}self_{(t-1)j} + e_{tj}$$

* **other**=ターゲット得点。 **other_{tj}**は **t** 時点での **j** グループの **i** 番目の人のターゲット得点。

³ 5つのカテゴリ(単語, 人, 略語, 映画, 日付)から出題される非常に難しい問題に対して、正解を答えるか、他のプレイヤーに正解だと思わせるようなそれらしい答えをすることで得点を稼ぐゲーム。日本の「たほいや」と似ている。

⁴ <http://davidakenny.net/ip/soremo.htm> に詳細あり。プログラム・サンプルデータのダウンロードも可能

- * **self**=自己評価,
- * **t-1** は先週の効果.

• **Level2**

$$\pi_{0ij} = \beta_{00j} + \beta_{01j}\text{gender} + \gamma_{0ij}$$

$$\pi_{1ij} = \beta_{10j}$$

$$\pi_{2ij} = \beta_{20j}$$

- * γ_{0ij} は好かれやすさの個人差を説明するための変量効果.

• **Level3**

$$\beta_{00j} = \gamma_{000} + \mu_{00j}$$

$$\beta_{01j} = \gamma_{010}$$

$$\beta_{10j} = \gamma_{100}$$

$$\beta_{20j} = \gamma_{200}$$

- * μ_{00j} はグループ間の好意度の差を説明するための変量効果.
- 自己評価の他者からの評価に対する遅れ効果は **0.01(p=.55)**→効果なし(**Table1** 上)

Sociometer

◇**Level1**

$$\text{self}_{ij} = \pi_{0ij} + \pi_{1ij}\text{self}_{(t-1)ij} + \pi_{2ij}\text{other}_{(t-1)ij} + \epsilon_{ij}$$

- * **Level2** 以降は同じ

- 他者からの評価の自己評価に対する遅れ効果は **0.26(p=.009)**
→**sociometer** からの予測を支持する結果(**Table1** 下)

Table 1
Multilevel Models Predicting Others' Evaluations and Self-Evaluations

Parameter	Estimate	SE	t test
DV: Others' evaluations			
Gender	0.05	0.02	2.20*
Lag-1 others' evaluations	0.36	0.04	9.23*
Lag-1 self-evaluations	0.01	0.01	0.60
DV: Self-evaluations			
Gender	0.11	0.05	2.13*
Lag-1 self-evaluations	0.62	0.04	17.30*
Lag-1 others' evaluations	0.26	0.10	2.63*

Note. $N = 151$. Gender is contrast coded (+1 for women, -1 for men). All other predictors are centered around their grand means.
* $p < .05$.

◇さらに、知覚された好意(**perceived regard**)の媒介効果を検討

- 各グループの他者について、「この人は私と友達であることを楽しむだろう (**This person would enjoy being friends with me**)」という項目を評定させる。これから知覚されたターゲット得点を算出.
- 上記の **Level1** の式にこの得点を予測変数として投入
→しかし、他者からの評価の自己評価に対する遅れ効果は有意(**0.21,p=.034**)・・・知覚された好意の媒介はない
→知覚された好意は、自己評価に独立な効果(**0.14,p=.002**)

Attachment Influences on Self-Other Dynamics

◇Did Attachment directly influence other's liking or moderate self-broadcasting?

• Level 1

$$other_{ij} = \pi_{0ij} + \pi_{1ij}other_{(t-1)ij} + \pi_{2ij}self_{(t-1)ij} + e_{ij}$$

• Level2

$$\pi_{0ij} = \beta_{00j} + \beta_{01j}gender + \beta_{02j}anx + \beta_{03j}avd + \gamma_{0ij}$$

$$\pi_{2ij} = \beta_{20j} + \beta_{21j}anx + \beta_{23j}avd$$

⇒不安(-0.03, p=.32)も回避(-0.01, p=.66)も主効果なし(Table2 参照)

⇒しかし、予期しない自己評価と愛着不安の交互作用が有意(0.03, p=.04)(Figure2 参照)

…愛着不安が弱い者は、自己評価が低いほど他者からの好意が高い。一方、愛着不安が高い者は、自己評価が低いほど他者からの好意が低い

Table 2
Multilevel Model Predicting Others' Evaluations, With Attachment Dimensions as Predictors

Parameter	Estimate	SE	t test
Gender	0.07	0.03	2.64*
Lag-1 others' evaluation	0.29	0.04	7.26*
Lag-1 self-evaluation	-0.00	0.02	-0.16*
Anxiety	-0.03	0.03	-1.02
Avoidance	-0.01	0.03	-0.44
Anxiety × Lag-1 Self-Evaluation	0.03	0.01	2.06*
Avoidance × Lag-1 Self-Evaluation	0.01	0.01	1.04

Note. N = 151. Gender is contrast coded (+1 for women, -1 for men). All other predictors are centered around their grand means. *p < .05.

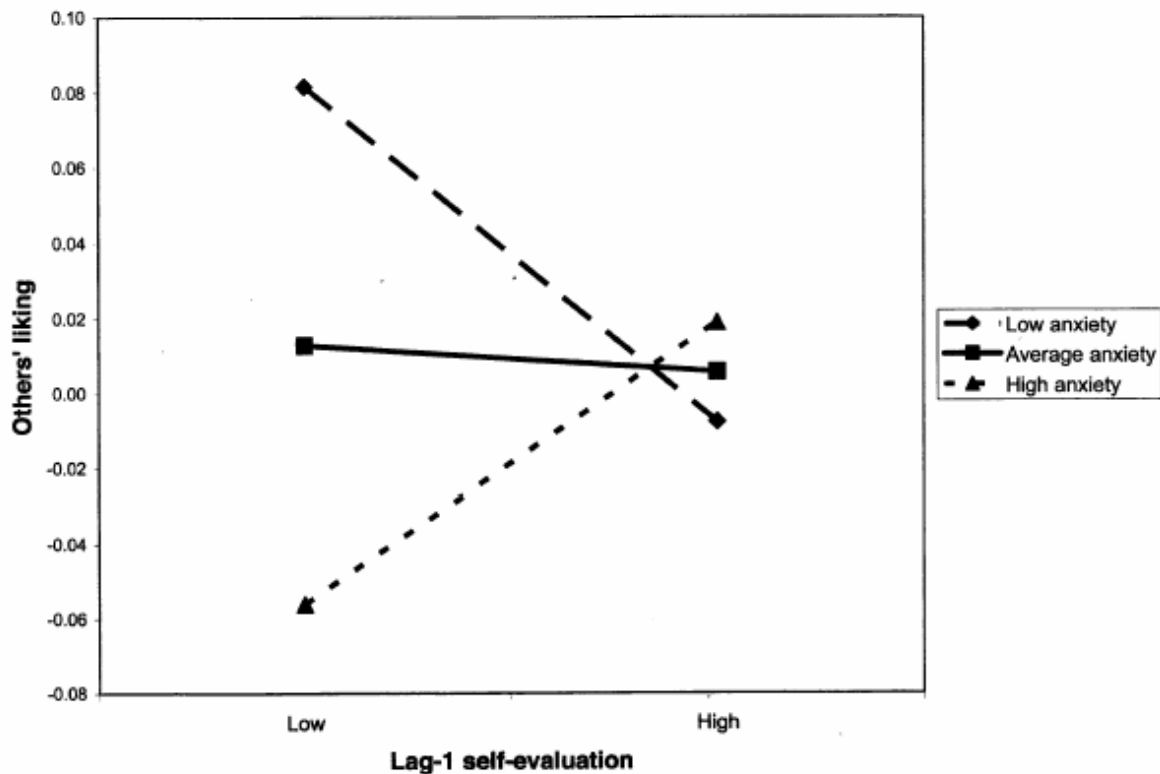


Figure 2. Others' liking as a function of Lag 1 self-evaluations and attachment anxiety, after Lag 1 others' liking was controlled. Low and high values were calculated on the basis of plus or minus one standard deviation.

◇Did attachment directly influence self-evaluations or moderate the sociometer?

- Level 1 : $self_{tj} = \pi_{0ij} + \pi_{1ij}self_{(t-1)ij} + \pi_{2ij}other_{(t-1)ij} + \epsilon_{tj}$
- Level 2 : $\pi_{0ij} = \beta_{00j} + \beta_{01j}gender + \beta_{02j}anx + \beta_{03j}avd + \gamma_{0ij}$
 $\pi_{2ij} = \beta_{20j} + \beta_{21j}anx + \beta_{23j}avd$

⇒愛着不安(-0.13, p=.01)と愛着回避(-0.15, p=.003)の主効果が有意

⇒愛着不安と他者からの評価の交互作用が有意(0.24, p=.02). 愛着回避と他者からの評価の交互作用は有意ではなかった(-0.01, p=.95)

…愛着不安が特に弱い者は自己評価が他者からの評価に影響されず, 高い.

…愛着不安が平均水準の者は, 他者からの評価が高いほど自己評価が高い.

…愛着不安が特に強い者は, 他者からの評価が自己評価に及ぼす影響が, 最も強い.

⇒知覚された好意と愛着不安との交互作用を追加しても, 上記の効果に変化なし.

Table 3
Multilevel Model Predicting Self-Evaluations, With Attachment Dimensions as Predictors

Parameter	Estimate	SE	t test
Gender	0.14	0.05	2.79*
Lag-1 self-evaluation	0.57	0.04	15.22*
Lag-1 others' evaluation	0.27	0.10	2.81*
Anxiety	-0.13	0.05	2.57*
Avoidance	-0.15	0.05	3.01*
Anxiety × Lag-1 Others' Evaluation	0.24	0.10	2.33*
Avoidance × Lag-1 Others' Evaluation	-0.01	0.10	0.06

Note. $N = 151$. Gender is contrast coded (+1 for women, -1 for men). All other predictors are centered around their grand means.
* $p < .05$.

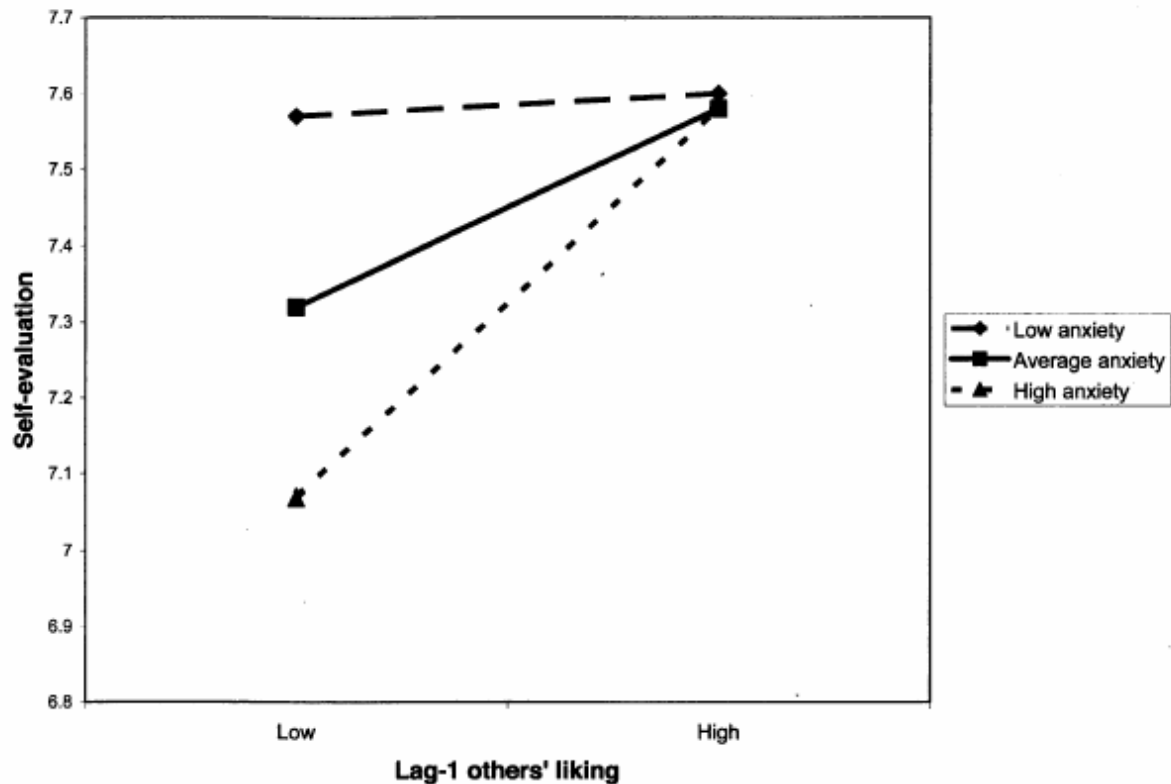


Figure 3. Self-evaluations as a function of Lag 1 others' liking and attachment anxiety, after Lag 1 self-evaluations were controlled. Low and high values were calculated on the basis of plus or minus one standard deviation.

Follow-up Analysis With Gender

◇ここまでは、性別は制御変数として主効果のみを検討。ここで補足的分析として、性別との交互作用を含んだ一連の分析を実行。

- ・基本的な **sociometer** の効果、および愛着不安の効果には男女差がない
- ・しかし、自己評価に対する、愛着不安と性別の交互作用が有意
…女性では、愛着不安の自己評価に対する効果が有意($-.25, p<.001$)、しかし男性では非有意($.06, p=.47$)

Discussion

◇本研究では、**self-broadcasting**(自己評価が他者からの評価に影響する)ではなく、**sociometer**(他者からの評価が自己評価に影響する)を支持する結果が得られた。

◇愛着スタイルの調節効果に関しては、

- ・愛着不安・愛着回避は自己評価を低める効果。ただし、不安の効果は女性のみで見られた。
- ・愛着不安は、**sociometer** を増進(他者からの評価が自己評価に及ぼす影響を強める)するという結果が得られえた。

The Social Regulation of Self-Evaluation

◇自己の個人的側面と社会的側面を別個に考えることには発見的価値があるが、社会的生活との関連付けずに自己を概念化することは想像しがたい。では、自己はどのように社会的文脈の中似埋め込まれているのだろうか？

→本研究で **self-broadcasting** と **sociometer** という 2 つの見地を検討。結果は **sociometer** を支持するもの。

◇近年の自己評価研究は個人的な動機によるバイアス(ex.自己正当化, 自己高揚)に注目

→**sociometer** は、上記のような視点に基づく研究を、自己の社会的制御(**social regulation of self**)への注目をもって補完する。(関係が自己を変えうるという視点)

→また、今回の研究知見は、自己の社会性(**social embeddedness**)が必ずしも特定の文化に限られたものではないことを示唆している(アメリカ人の自己も社会的)。

⇔Markus & Kitayama (1991)の、アメリカ人は相互独立・東洋人は相互依存という図式⁵

◇今回の結果は、あくまで“1週間後の”影響を検討しているもの。

- ・単純な一般化はできない。
- ・1週間より前に、或いは1週間より長い潜伏の後現れる効果は見落としている可能性
→ある期間を取り出せば、**self-broadcasting** を支持する結果が得られるのかもしれない。

◇愛着不安の強い者は、**self-broadcasting** と一環する反応を示し、愛着不安が弱い者は、

⁵ 他者からの評価が自己評価に影響を与える(今回の知見)と、自己定義に他者がどの程度かわるかという問題(Markus & Kitayama の主張)は排反ではないと思います。北山(1998)は、自己観の違いは「文化・社会に適応し、そこにあるコミュニティで「一人前」の人となり、そのように回りからも認められるための必要条件(ライフタスク)」(p39)の違いを生ぜしめると論じています。これに従えば、どのような自己観を持っていようが、周囲の他者から認められることは重要な意味を持つと考えるのが妥当だと考えられます。

self-broadcasting と逆の反応を示した→愛着不安の程度により、自己評価の低さが意味するところが違う？

…愛着不安の低い者にとっては社会的に望ましい謙遜、愛着不安高者にとっては自己非難や社会的領域での自己効力感の低さ？

Conscious Mediation and Perceived Regard

◇今回の分析では、他者からの評価の自己評価に対する効果は、知覚された好意に媒介されていなかった。同時に、知覚された好意は自己評価に正の影響を与えていた。

→好かれていると思うことと本当に好かれていることが、独立に自己評価に影響を与えている。

◇以下の点から結果の解釈には注意が必要。

- ・他者からの評価の項目と知覚された好意の項目が厳密に対応していない。
- ・自己評価の項目が知覚された好意の影響を受けているかもしれない。

→この人は私が好きだ(**This person likes me**)という項目を用いていればよりよく意識的媒介を検討できたかもしれない。

◇しかし、この現象はさらに研究する価値がある。もし再現されれば、人の自己感覚は、他人が本当はどう思っているのかわらなくても、他者からの評価に影響されることが示唆される。

- ・ **sociometer** は意識的な思考によらないが、意識的にアクセス可能な信念も自己に別の影響を及ぼす。
- ・ 社会心理学における **Dual Process Model(Chaiken & Trope,1999)** と整合
 - …無意識的過程を連合ネットワークで説明する
 - …今回の知見(**sociometer** は意識的過程に媒介されていない)もこの枠組みで説明されるとすれば、自己の表象は他者の社会的行動により直接的に活性化される、自己表象の形成も他者の社会的行動に拠っていると考えられる。

Making Connections to Attachment Theory

◇今回の研究結果：愛着不安・愛着回避それぞれが自己評価に負の影響

- ・ 先行研究でも、男女問わず愛着不安が否定的自己評価に寄与することが示されている

(**Bartholomew & Horowitz,1991; Mickelson et al.,1997**)

→今回は女性でのみ先行研究と一貫する結果

- ・ 一方、愛着回避と自己評価の関係に関する知見は一貫しない

→今回の研究では、愛着回避が高いほど自己評価が低いという結果

- …今回は対人的文脈で社会的な自尊心を測定している、また、自尊心は様々な源から引き出せる(**Crocker & Wolfe, 2001**)ということを考えれば、愛着回避が高い者が能力領域で高い自己評価を示す時、それは社会的領域での自己評価を補償するためのものなのかもしれない。

◇また、今回の結果では、愛着不安が高い者は、より敏感な **sociometer** を保持していることが示されている。→愛着と **sociometer** それぞれの機能主義的説明を概念的に結びつける

- ・ 愛着不安は、一貫しない養育によって醸成され、身体的近接性や情緒的支援が利用不可能な時

でも、それらを得ることに固執する行動傾向として現れる

…敏感な **sociometer** を持つことにより、近接性や支援が利用可能なときに、迅速に反応することができる。よって、愛着不安が強い者が敏感な **sociometer** を持つことは機能的。

◇一方で、愛着回避が高い者が鈍感な **sociometer** を持つことを示す結果は得られなかった。

- ・ **Mikulincer & Shaver(2003)**は、愛着回避の社会的情報の処理に対する影響は、愛着システムへの脅威が存在する時にのみ顕現化すると見出している
→愛着回避の高い者は、今回のグループでの相互作用状況を愛着関連状況だと解釈していなかったのかもしれない。

◇今後研究するに値するのは、愛着が他者からの評価に影響を及ぼさなかったこと。

- ・今回は他人同士の相互作用状況を設定しての検討。関係形成の初期では、愛着スタイルによる顕現的な行動の違いは、他者を安全基地だと思ふ等、内的で目に見えない側面での違いほど早くは現れない
→今回観測した結果は内的なもの。関係が進展する十分な時間を設ければ、既存の関係を検討した先行研究同様(**Simpson et al.,1997**)、顕現的な社会的行動が愛着スタイルにより大きく影響されるようになるかもしれない。

Attachment as a transactional system

- ・より広い観点から、今回の結果は愛着システムの相互交渉的(**transactional**)視点を支持するもの。他者からの嫌悪に対する反応の仕方に個人差が存在することを考えると(**Caspi & Roberts, 1999**)、特に不安の効果は反応的相互交渉(**reactive transaction**)であろうと解釈できる。
→同じ状況で相互作用している個々人が、極めて異なった経験をしていることが示唆される
…愛着不安の低い人は、多くの人々(自分のことを好いていない人)と容易に相互作用を持つことができ、他者の意見に影響されないかもしれない。対照的に、愛着不安の高い人は高水準の受容と支援を与えない人と相互作用を維持することに困難を感じるかもしれない。
➤**Murray et al.(2002)** : 恋愛関係で、上記と似た知見を示している
低自尊心者はパートナーの否定的評価を、関係が危機状態にあることのサインと考えるが、高自尊心者はそのような捉え方はしない。

Attachment and social groups

- ・今回の結果は、愛着の個人差が集団過程に影響を与えるという考えを示唆。
・集団での愛着に関する先行研究では、個人の集団に対する知覚(集団への愛着; **Smith et al.,1999**・集団の結束に対する知覚; **Rom & Mikulincer, 2003**)が注目されてきたが、今回の研究では、その逆、つまりその個人が集団内の他者にどう思われるかに注目
→集団を知覚対象としてだけでなく、知覚者として扱う研究は、愛着と集団の社会的知覚に関する研究に資するであろう。

Alternative conceptualizations of attachment dimensions

- ・今回の研究では、愛着不安と愛着回避を、過活性方略と活性不全方略を反映するものとして捉える枠組みに依拠したが、不安と回避の2次元の捉え方は、他にも存在する。

➤**Fraley & Shaver(2000)** : 愛着不安は脅威検出システムを, 愛着回避は行動制御システムを反映すると考える

→**sociometer** の効果を愛着不安が調節する, という結果と一貫. しかし, 愛着回避が他者からの評価に影響しなかったという結果とは非一貫(愛着回避が行動制御システムを反映するならば, 愛着回避が低いほど制御をよく行うことができ, 他者から好かれるはずだから?)

➤**Bartholomew & Horowitz(1991), Klohnen & John(1998, 2003)** : 愛着不安を肯定的-否定的自己モデルの次元, 愛着回避を肯定的-否定的他者モデルの反映として捉える.

→愛着不安が否定的自己評価と関連する, という知見と整合. また, 先述の **Murray et al(2002)** とも一貫.

→しかし, この立場からは, 愛着回避は **sociometer** の感度を低下させると考えられる(愛着回避が高いと他者モデルが否定的になり, そのため, 他者からの評価を軽視・批判するようになるため?)…今回の研究結果では先述の通り, そのような予測が支持されていない.

•愛着を次元でなく, スタイルで捉える立場からは, 今回の結果を違った形で見ることが出来る. 安定型と撤退型は共に愛着不安が低い, それぞれのタイプの **sociometer** が鈍感である理由は, 全く違うかもしれない.

→安定型の個人は, 集団から嫌われている時でも, (おそらく内在化された) 他のサポート源に頼ることが出来る. 一方で, 撤退型の個人は, 単純に他者からどう思われようと気に留めないのかもしれない.

The Importance of Integrating Interpersonal Process and Individual Differences

◇個人間過程と個人差の研究を統合することで, 双方の立場に益がある

→本研究では, 先行研究で普遍的だと思われていた **sociometer** の効果が, 個人差変数(愛着不安)によって調節されることを示した.

◇自己評価は複雑

• 状态的・状況的自己評価と特性的・安定的自己評価は決して排他的ではないし, 自尊心研究では, 個人の自己評価はつねに状況と特性双方の影響を受けているという見方が支持されている (**Crocker & Wolfe, 2001 ; Trzesniewski et al.,2003**).

• しかし, 今回の研究結果から, 自己評価への状況的・特性的影響は単純に加算的ではないことが示唆される.

…実験研究で無作為化により個人差の影響を除去することや, 相関研究で状況の影響を合成してゼロにしてしまうことには, 実際的な意味がある. しかし, そのような方法は, 個人と環境の相互作用を検出することを不可能にしてしまう.

→自己に関する理論を発展させるには, 今後の研究は実験・相関研究以外のパラダイムも採用することが必要だろう.